

短編小説『無職哀士』

whitecaps

注意…この小説はフィクションです。実在の個人や団体とは一切関係ありません。この短編小説では作品性を重視するため、実際の団体の実態とは関係なくその団体を否定的に記述している部分があります。

順悟はその時カプセルの中でテレビを見ていた。今見ているのはお笑い番組で、順悟は番組を見ながら腹を抱えてゲラゲラ笑う。カプセルの中の空気を入れ換えている換気扇の音がゴォーとうなり、スタジオの笑い声をかき消していた。

リリリーン、リリリーン！

その時、目覚まし時計がけたたましくなる。順悟は笑うのをやめて、チョップをかまして目覚ましを止めた。出かけなければ。もう時間だ――。

今田順悟。 24 才。男。無職。

順悟はいわゆる派遣労働者として、この前まで大手コンピュータ機器メーカー傘下のデジタルカメラの組み立て工場で働いていた。当座はそれでしのぐつもりだったのだが、しかしその仕事も順悟がまだ仕事に慣れないうちに、ちよつとした部品の組み立てミスをしただけで一方的に「雇用を解除」されてしまった。――順悟は昔パティシエになると言う夢があつたが、そんな夢を追うようなことはもう昔の話だった。

今は順悟は職を探しながら、都会の雑踏の中のカプセルホテルで寝起きしている。このカプセルホテルに来た

のはもう3ヶ月前になるが、だからといって順悟に決まった居場所があるわけではない。

——今は冬だ。

今日は順悟はハローワークに来ている。このご時世に需要があるのか最近新しく建て替えられたらしく、白塗りの建物はまだピカピカだ。

部屋の中にはいると、対応窓口まで列が続いている。順悟はその列に並んで順番を待ち、自分が呼ばれるのを待った。しかし列が進むにつれて、順悟の目は不愉快なものをつめた。

(おい、ちょっと待て。またあいつかよ)

しばらくして順悟が呼ばれると、そこにはいつものあの職員がいる。

眼鏡をかけ、書類を手早く仕分けるその男の胸には「鎌田かまた」という名札がつけてある。順悟は「鎌田」に気づかれないように舌打ちをすると、窓口の席まで歩いていって足を組んで座った。

「ええつと、今田さんですね。こんにちは。」

順悟の威嚇行為にもいっこうに構わないその眼鏡の縁がキラリと光る。

「先週申し込んだ企業の方ですが、残念ながらもう他の人で枠が埋まってしまったそうなので、残念ながら今田さんと契約することは出来ないとのことでした。ええ。また今田さんからは是非ともお願いしますと頼まれていました区の臨時職員採用試験への願書提出ですが、やはり必要な資格がないと難しいと言われまして、こちらも残念ながら受理することは出来ないと言われました、ハイ。では、今後の今田さんの研修スケジュールをお話します——」

鎌田は無言の順悟を置いておいて、書類に目を落としのまま一人で抑揚もなしに黙々としゃべり続ける。

順悟がふと奥を見ると、窓からはブラインドの隙間を縫って冬の弱い日差しが差し込んでいた。

順悟は部屋を出るときについ呟く

「つたく、なんなんだあの『お役所仕事』！。全然人を就職させようなんて気さらさないじゃねえか。いつまでも研修ばつかやつてられつか！」

順悟は今度は廊下に響くくらい大きな舌打ちをする、しかしそのとき

「あんまり怒りなさんな。」

後ろから誰かが声を掛けてきた。

「しょうがないんだよ、私たちは無職なんだから。私たちは弱い立場なんだ。」

「あなたは？」順悟はあまりの急なことに不機嫌さも収まって、その人を振り返る。

「私も無職の老いぼれさ。ちよつとは仕事紹介してくれるかと思つてきてみたけど、このご時世じゃあね。もう、私はここには来ないよ。君も、いろいろあるだろうけど、頑張りなさいな——」

午後は部屋探しだ。順悟は今日もいつも通っているカプセルホテル近くの不動産屋に来た。もう何度も来ているので、その店の店長とも顔見知り。今日は店長直々に応対してくれ、いつも窓口に座っている嬢は奥でコーヒーを入れている。

「ええと、これと、これ、そしてこれだね。え、エアコンがついてないかつて？ うーん、悪いけど最近はその言う物件はないねえ。どこもかしこも高くなつててねえ。スキマがない方がいい？ ここなんかそうだけど。でも……でも、とつても安いんだけど、ここはまえ殺人事件が起きたつて言うからねえ。まさかうちでそんな物件勧めるわけにも行かないしねえ。」

順悟はコーヒーを吹き出しそうになる。

「もつと駅に近いところはないですか？」

「そうはいつても、もう今は君が提示してくれる程度のお金で借りられる部屋はないんだよ。そりゃお金をいくらでも積めばどこだって手にはいるよ。でも今はみんなお金がないんだからねえ——」

結局、今日もちょうどいい物件は見つからなかった。

次の日の夜。何も事態は進展しないまま、派遣労働時代の昔の仲間達と飲み会をやることになった。場所は昔仕事終わりに良く通っていた居酒屋。その居酒屋に集まった皆は、酒の力も借りて、日頃の鬱憤を晴らすようにわあわあ喚いた。

「いやあ、全くあの部長と来たら頭カタいつてなんの」

「聞いたか、前俺たちが働いていた職場じゃ今はライン生産やめてセル生産方式になったつてらしいぜ」

「全く、日本のどこに金が落ちてんのか。金持ちはどこに金しまつてやがんだ」

「金融危機だのなんだの言つたつて、リアジェットで移動するアメリカの社長がいるんだからな。あんなのに融資発動だなんて、ふざけてるよ」

居酒屋の天井につり下げであるテレビでは、時の首相がたくさんのマイクの前で演説をぶっている。この首相

は失言とかなんとかで支持率が急激に低下して、今は最大野党の主民党に政権交代まで迫られているが、一体これからどうなるだろうか。

「わたしたちは、皆様の生活の安心を第一に考え、少しでもこの停滞する日本経済を立て直そうと日々努力しております。……」

そして順悟は一人黙々と串焼きを食べる。

その時、画面が切り替わつてテレビにある工場の派遣労働者の代表が現れた。

「わたしたちは、ただ職がほしい、仕事がいい、生活を守りたい、その一心で働いて参りました。しかし、今回のKan-onからの一方的な解雇通達をうけて、これはほんとに労働者の心を踏みにじる、許し難いものだと思います。私たちは会社側に対し、派遣切りはやめてもらいたい、派遣労働者の権利を確保してほしいと、そう――」

皆がその会見を見ていたときに、仲間の一人がこう
いった

「確かうちの工場にもこんなかんじの活動やってる人
いたよな」

「たしか、水戸さんって言う人だろ」

「あの人が頑張ってくれば俺たちもあの職場に戻れ
るかなあ——」

皆がそんなことを言っていると、仲間のうちの一人が口
につまんでいたゲソ焼きを食いちぎり、わざとらしく人
差し指を立ててこう言いだした。

「おい、おまえ達聞いているか？その派遣労働者代表の
水戸さん、この前会社のお偉方からけつ、こうな大金も
らったらしいぜ」

「え、マジ!？」

「ああ、会社のお偉いさんがこのままじゃ派遣労働者
側への世論の後押しもあってヤバいって思ったらしくて、
口封じのために会社の裏金を『おやつ』したんだってよ。
あの人運動のトップにいただろ。金もらってからはもう

活動に来なくなっちゃって、リーダーがいなくなつてう
ちの派遣の労働者活動はダメになっちゃったってさ。」

「うわ、ひでー」

「なんだよ、つまんねー」

順悟はその話を片耳にやはり串焼きを食べる。皆はそ
の後もわいわいと騒々しく騒ぎつづけた。

そして話は今の職場の話へ。

「なあ、おまえ今の職場どんな感じ？」

「ああ、一応大企業なんだけど、製造部門は立場悪く
てさ、みんな上司とか他部門の人間にヘコヘコしてんの、
俺もそうするしかないからさ、やんなっちゃうよ」

「おれは就職したとこの親父さんがいい人でさ、とき
どきおごつてもらって、グチも聞いてもらえるんだ」

そんなことを言ってる間に、仲間の一人が順悟に視線
を移した。

「順悟、おまえはどうだ？おまえは今の仕事はど
う？」

「え、おれ？」

皆の視線が順悟に集まる。一瞬順悟は言葉に詰まったが、

「いやー、おれのいるところは結構給料良くてさー。

ときどき歌舞伎町に行っちゃあ、散財しちゃうんだ

よ。」

みんなは顔を見合わせた。

しかしそれを真に受けたその中の一人が目を輝かせていう。

「え？そうなんだ。いいなあ、うらやましいなあ。」

僕なんかコンビニで買うペットボトルの値段まで気にする位なのに——」

すると、やはり仲間達はそんなこんなな積もる話をして、ようやく飲み会はお開きとなった。

そしてレジに行つて払うとき、順悟はポケットをあさるふりをしたあと、横に立っていた友人に頼みこむ。

「ごめん、光博^{みつひろ}。俺今日財布家に置き忘れちゃったみたいでさ。代わりに払つてくんない？ 今度返すからさ、頼む！」

「んだおまえ？財布忘れた？仕方ねえなあ、払つてやるよ。」光博は札をもう一枚めくる。

「この恩忘れんなよ。おまえタクシー代はあるか？駅まで必要だろ。今度会つたときに返してくれよ。」

「ありがとー光博。ほんと助かるよ。やっぱ持つべきものは友だよなあ——」

順悟がタクシーと電車を乗り継いでカプセルホテルに着くと、ちょうどカプセルホテル併設の浴場から客が引き上げてくるところだった。

「よう、どこいつてた、今田君。」

そう言つて声を掛けてきたのはこのカプセルホテルに長年「住んで」いる、年配の今山^{いまやま}という順悟に似た名字のおじさんだ。風呂上がりのパジャマ姿からは中年太りの腹が出ているのが見える。

「ちよつと飲み会に行つてました。」順悟が頭を下げながらそう言うと、

「へえーそれはいいねえ、青春してるねえ」

おじさんはまだ湿っているタオルを肩から提げて、ロッカーからある物を取り出した。いつもの通りその缶をプシュッとあけると、今山はビールをゴクゴク飲み始める。

今山はビールが大好きで一時は発泡酒ばかり買つて飲んでいたが、今は税制優遇によるメリットも薄れ、普通のビールを買うようになった。

「あーうまい！ビールは人生の友だ、な！今田君」

すると風呂から上がってきた後続の人が二人に声を掛ける。

「お、イマイコンビがジジくさく人生談義かあ？」

「そーだ、俺たちは人生の友だあ！ビールも人生の友だあ！」

今山はフロアーの中心で大げさに叫ぶ。

「ちよつと……今山さん！」

(今田) 順悟と今山はカプセルホテルの仲間から二人あわせて「イマイコンビ」とちゃかして呼ばれることがあるが、順悟はそのことを喜んではいない。しかし居酒屋でお金のことを気にしてあまり食べなかつた順悟は、そのビールがおいしそうに見えたのに気がついた。ああ、飲みたい。

(いかにいかに、こんなようでは。今日は早く寝よう。)

今田がカプセルの中にはいると、カプセルの中はちよーうどいくら暖房が効いていた。そして順悟はカプセルの中で隣のおじさんがいびきを立てるのを聞きながら、今日の眠りについた。



次の日も、職探しだった。

（もう職安なんか頼ってられない。自分で見つけな
いと）

そう思った順悟は一人で企業を訪問することに決めて
いた。企業の受付にでも直接交渉に行くつもりなのだ。

（なんとしてでも職を得るんだ。今山さんが言つてた
けど、あのホテルからも昔、企画した事業に成功して卒
業してつた人がいるらしい。俺もその仲間入りを果たさ
ねば。まずは元金作りからだ。）

順悟は会社をあたるため、近所の川沿いの道を通つて
向かうことにした。対岸にはある大企業の支社の建物の
H U T A C H I と書かれた看板が、日の光を反射して
光っているのが見える。

川辺では子供が数人、釣りをしているのが見える。
所々、バケツの破片のようなプラスチック片が川岸に浮
かんでいるのが見えた。そしてそのよこではおじさんと

言つたくらい年齢の人が薄汚れた服を着てやはり釣り
をしている。

何気なく通り過ぎようとした順悟だったが、少し歩い
てその横を通り抜けようとしたとき、子供達が喚き始め
た。

「ああ！ああ、糸が絡まつたよ。もう、おじさん、
もつとあつちいつてやってくんない？」

「なんだと？ わしが先にここで釣りしとつたんじゃ
ないか。」

「うっせーな。この川は子供優先だ。ホームレスは
引っ込んでろ！」

「引っ込んでろ！」

「引っ込んでろ！」

「なんじゃと、子供だと思つて大目に見ておつたが、
もう許せん。悪い子は食つちまうぞく！」

初めはほつとこうと思っていた順悟だが、構える両陣営を見て慌てて止めに入る。

「ちよつと、なにやってんですか。ほら君達も人をはらかわない！もう〜」

すると少年の一人が上目遣いで聞いてくる。

「おじさんこそ誰だよ。いきなり入ってきて」

「そうだよ」

「だれ、おじさん」

「俺は……」

俺が誰かって？ え？俺って、誰なんだろう……。

一瞬答えに詰まった順悟だったが、しかしすぐ正気に戻り

「え、俺？おれは……あそこの会社で働いてる会社員」

と咄嗟に対岸の『HUTACHI』を指さして答えた。

「ふーん？ほんと？あそこの会社に行く人はみんなあつちの橋を通っていくけどな。」

少年は疑り深げな顔をする

「今日は、会社ないんだ。ほら、シフトって言って、シフト。わかる？」

少年はよくわからないという顔をした。



「いやー助かったよ、あんたのおかげで。全くいまどきのガキは年上にどう口をきくのかもわからんのじゃからな。」

暇だといった順悟は、さつき釣りをしていたホームレスのおじさんに「家」に誘われていた。

「おじやましまーす」

そう言うべきかわからなかったが、一応順悟はそう言うとそのテントに入った。テントは廃材の骨組みに良くある青いビニールシートで覆われ、雨風しのげるようになっていて、ここらあたりにはそんなテントが川沿いにたくさん立てられているのだ。

中はおじさんのものらしい持ち物が棚に埋め尽くされている。その順悟の視線に気づくと、おじさんはこういった。

「はは、それらがわしの全財産じゃ。」

順悟はテントの中でしばらく一緒におじさんと話す。

そのおじさんは英世ひよという名で、ホームレスになったのは5年ほど前のことだそうさ。昔は妻も子供もいたが、彼らは英世についていくのをいやがって、妻の実家に帰ってしまった。じき英世は一人都会を彷徨い、この川辺にたどり着いた。

「おう、そうさ。」

英世と名のつたおじさんは思いついたようにそういうと、棚に置いてあった新聞紙に包まれた物を取り出した。英世が包みを開くと、それは魚の塩焼きだ。

「これはその川でさつき釣った奴を塩焼きにしたものだ、川魚はうまいぞー。君もどうだい、一本！」

順悟は食べたかった。

でもどこに大企業に勤めているのにホームレスから魚の塩焼きをもらう会社員がいるだろうか。大体あの川は捕った魚が食べられるほどきれいなのだろうか。順悟はさつき川に浮かんでいたプラスチック片を思い浮かべる。

ダメだ、食べられない。

順悟は「自分は食は足りています」とむなしの嘘をつくくと、後ろ髪引かれる思いのまま、英世を残してテントをあとにした。



夕方、やはりどこの企業からも断られた順悟は、元カノに呼び出されてコーヒーチェーン店にいた。周りにはびしっとしたスーツを着たビジネスマンやOLばかり。その店の中ほどで、元カノは待っていた。その彼女の名は佳乃かのという名前だ。

順悟は大学卒業のすぐあと、自由を求めて企業を転々としていたのだが、佳乃はそんな羽振りがいいときの彼女だ。しかし、順悟が仕事がうまくいかず、経済的に行き詰まってくると「私ビンボーは嫌なのよね」と言つて佳乃は順悟と別れた。そう言う佳乃はバリバリのキャリアアウーマンで年収は今の順悟の比ではない。

「あたしもつと高い店がよかつたんだけどな。」

佳乃はそういうと長いストッキングをはいた足を組み替える。

「ごめん、俺今金なくてさ」

順悟がそう言つて家から持ってきたマイカップをすすると、佳乃はため息のようにタバコの煙を吐き出した。

「あんた変わっちゃったよね。私たちがつきあつてる頃はあんたは自由追い求めてさ、かつこよかつた。なのに今はただのビンボーになっちゃった。ほんと、かつこわる……——」

結局その後二人とも黙りこくつたままで、たいした会話もなかった。

帰り際、佳乃はジャンパーを一着、順悟にやる。タグにはユニクロと書いてあつた。

「あんた、風邪引きなさんなよ。」

そう言い残すと、佳乃はうなだれる順悟を置いてタクシーで家まで帰つていった。

順悟は帰り道、暗がりの中猫が走るのを見る。

通りには、テレビに出ていたあの首相がポスターとして貼られていた。

「改革前進！自由民主党！」

しかし、順悟はそれを一瞥すると心の中で呟く。

（俺には関係ない話だ。どうせ俺は選挙になんか行きやしない）

そして順悟は寒風にはためくポスターを背にして、

21 世紀の暗黒街に消えていった。

◆◆◆
一週間後、順悟は暖かいこたつの中にいた。

「休み」にはいると故郷の実家に帰ることになっているのだ。順悟の両親は農家をやっており、稲作をしている。父親の今田富里はもう歳で、視力が悪いがいたって健康。千賀子は母親。夫と同じく歳だが、やはり健康。千賀子の方はおしゃべりが好きで、良く近所の人と茶飲み話をしていた。

茶の間のテーブルには、冬は近所のみかん農家の人がつくったみかんがいつも常備してある。

日本海側にあるこの地方では、冬には良く雪が降る。

今日も順悟の実家の周りでは雪がちらついていた。順悟がこたつの中で体を起こすと、稲が刈り取られたあとの田んぼに雪が少し積もっているのが見える。

「どうら、俺は納屋に行つて干し柿でも見てくるか」
富里がそう言つてこたつからたつと、

「雪の下じきにならんよう気をつけてください」

千賀子がこたつから身を乗り出して呼び掛けた。その後千賀子はテレビをつける。

「全くデジタル放送というのはわからんわ。どう違つたもんやら、チャンネルも違うし、リモコンも複雑やし」

千賀子はぶつやく。

順悟の実家の家は、この前家電屋に勧められるままにテレビを買い換えた。しかし夫婦には操作が複雑すぎるらしく不評。自慢の高画質にもあまり興味がならしく、わざわざ画面を「ノーマル」にしてみている。

「まったく、アナログ放送は止めんでもいいのに」

千賀子はそう言つてチャンネルを変える。順悟はそのままこたつの中でうつらうつらしてきていた。

——そのとき、玄関の戸がガラツと書く音がした。誰かがやってきたのだ。

「今日も冷えるねー」。

「あら、昭子さんじゃないの」

お客さんだ。順悟はとうとう目を覚まさないわけにはいかなかった。——そしてやってきたお婆さんは順悟がいることに気づく。

「あら、順ちゃんも来てるのね。よかった、お土産持つてきたのよ」

(全然良くない)

眠かった順悟は不謹慎だと思いつつもそう心の中で呟いた。

昭子お婆さん(親戚というわけではないが、ご近所さんなのでこう呼んでいる)は、千賀子がお茶を用意しておしやべりを始めるとつもる話がたくさんあるらしくなかなか帰らなかった。

「聞いたる？ 勝股さんところ、この前オレオレ詐欺の電話が掛かってきた言うてたよ。」

「あら、そうね」

「たまたまその後ほんもんの息子さんから電話が掛かってきて、騙されはしなかったそうだけど、最近は何も手口があくどいからねえ。私も心配だわ。」

そして話は進む。

「ちよつと私んところも年金の制度が変わるとか言う話でね。ころころ変えられても覚えきらんさい。全く政治家は何やつとんのかつちゅう話だわよ。」

「あらーそうね。」

さらに進む。

「とつちゃんところは親戚が階段下りるとき足くじいたとかでね。入院しんさった。」

「あらー、大丈夫ね。」

「くじいただけけん大丈夫や、とは言うてたけど」

そして話の種が尽きると、ついに昭子おばさんは順悟の方を見てこういった。

「順ちゃんは元気にやってるね。まあ、県随一の××

大学出だからバリバリ仕事してるわよね。」

「え、ええ、はい、おかげさまで」順悟は生返事する。

そのとき順悟はふいに学生時代の自分を思い出した。

受験受験、毎日受験勉強。

そのなれの果てが、今の生活なのか。

思えば、パティシエになると言う夢を捨てたのも、その頃だった。

もしあの頃、俺が夢を追っていたら――

その間にもおばさんは話を続ける。

「まあ、うらやましいわ。うちの子供なんか若くしてちっとも勉強せんの。ほんと、おたくはいいわね、秀才で。ほらほら、そこで貯金額を言ってみんさい！」

そう言われた順悟はしぶしぶ2本指を立てた。おばさんはそれを見てシャウトする。

「まあー2千万！。やっぱ大企業に勤めとると違うわねー！いや、こんな言い方しちや悪いわね。頑張つて働いたとよねー。」

順悟の今の全貯金は、20万円だった。

で、昭子おばさんはそう言うと、どうも親戚が福岡に行ったらしくて、お土産に「博多めんたいせんべい」を置いて帰っていった。順悟はこれは持ち帰っても腹の足しにはならないだろうと思ひ、すぐ封を開けて食べ始めた。

そのうち千賀子も眠り始める。

そして順悟が一人テレビのおもりをしてしていると、携帯電話が鳴った。

「ああ、則華かよ、なんだよいきなり。」

それは離れて暮らしている妹の則華だった。則華は別の地方都市で暮らしていて、結婚して元気に暮らしている。

「いや、順兄が帰ってきてるって聞いてさ。あんまり最近の話さないしき。でき、単刀直入に言うとき……兄ちゃん、今、無職なの？——」

順悟はいきなりの問いかけに驚いた。

「ば、なに、何言ってるんだよ。俺が無職なわけないだろ。誰だよ、そんなこと言った奴」

順悟は無意識のうちに席を外した。千賀子は眠りに落ちたままだ。

「いやさ、順兄の彼女って人から、順兄に仕送り、ま、て言うか逆仕送りだけど、してやってくれないかって電話があつてさ」

「くそ、あいつ、余計なことを！」

「やつぱり、無職なんだ」

（しまった！）順悟は頭を抑えた。

「お母さん達には言っていないから、頑張つて仕事探しなよ。お母さん達によろしく。順兄も早く結婚しな。じゃあね。」

ブツツ。電話は切れた。

廊下から窓の外を見ると、雪は本降りになっている。

月見窓から富里が干し柿の手入れをしているのが見えた。

足が冷たい。順悟は携帯をポケットにしまうと、こたつに戻るべく歩き出す。



そしていま、順悟は電車に乗っている。都心の列車だ。

昨日順悟は故郷を発ち、東京に戻っていた。

これからいつもの自分の住み処に向かう。あのカプセルホテルだ

順悟は電車の椅子に深くもたれ込みながら、そしてうつむいて眠りながら、携帯ミュージックプレーヤーから流れる音楽を聴いていた。どれも昔の古い歌ばかり。外は建物の光以外真つ暗闇だった

順悟が故郷を発つとき、両親は順悟にあるものを渡した。それがそのミュージックプレーヤーだ。

順悟はいつも携帯で音楽を聴いていたので、両親は電気店のおじさんから小耳を挟んだ「ケータイはデータ容量が小さい」と言うことを聞いて、それならばと順悟にミュージックプレーヤーを贈ったのだ。そう、順悟の趣味に合わない、古い曲ばかりを入れて。

そして二人はこういった。

「もしなにか生活で困ったことがあったら、いつでも俺たちのところに帰ってきていいんだぞ——。」

優しくそう言うと、富里は順悟の手に「お年玉」と書かれた封筒を握らせた。

あとで開いたとき、その封筒には 30 万円が入っていた。

♪ 上野発の夜行列車降りたときから〜

不意にガタンと列車が揺れて、順悟は目を覚ます。

そして何気なく後ろを振り向くと、並行して走っていた列車の「竹橋行き」と書かれた電光表示が揺れながらどんどん離れていった。

(待つてくれ！待つてくれ！！！)

順悟は不意に窓ガラスにしがみつくと、横にいた乗客が怪しんだ目でこつちを見た。

そして我に戻った順悟は、降りる駅が近づいてきたことに気づき、何事もなかったようにドアの前に立った。

「墨久保〜墨久保〜」

アナウンスが流れ、ドアが開き、順悟はホームへ列車を降りる。すると順悟の体を佳乃がくれたユニクロの上から外の冷たい空気が包み込んだ。横を見ると、同じ列車から降りたたくさんの人たちがせわしなさそうに階段に流れ込んでいる。

そして順悟は一人、カプセルホテルへの夜道を歩いた。都心の空に星が1、2個輝いている。しばらくあるくと、カプセルホテルの屋上が見え始めた。

順悟は心の中で呟いた。

(俺はあそこに帰るしかないのだ。他に行く場所なんて、どこにもない)。

そして順悟は両親からもらったミュージックプレイヤーの音を耳元で聞きながら、都会の暗闇の中、家に帰っていった。

——順悟の目からは、涙がとめどなくあふれ出していた。

■ (2008.1.21)

テーマソング：『藍』スキマスイッチ (BMG JAPAN)

※印刷用PDFバージョンはNeoOfficeで組版したため文字の配置に多少乱れがあります。ご了承ください。